

## 巻頭言

### 特集「プログラムマネジメント教育の現状と展開」にあたって

東京工業大学／立教大学 吉川厚

P2M の重要さが認識されつつも広がっていない現状が続いている。このような中、拙稿<sup>1)</sup>を重要な課題として認識していただき、わずか一ヶ月程度で特集を組んでいただいた編集委員の皆様にもまず感謝の意を示したい。

研究分野において、P2M の教育・訓練がどのように扱われているのかを簡単にみるために文献データベース Microsoft Academic を使用

して調べてみた。キーワード Project, Program, Management, Training, Education で検索し、そのときのタイトルとアブストラクトから共起関係にあるキーワードを可視化したのが図 1 である。丸が大きいほど多く出現していることを示し、線が他のキーワードとの共起関係を示している。さらに色分けがクラスタリングを示している。

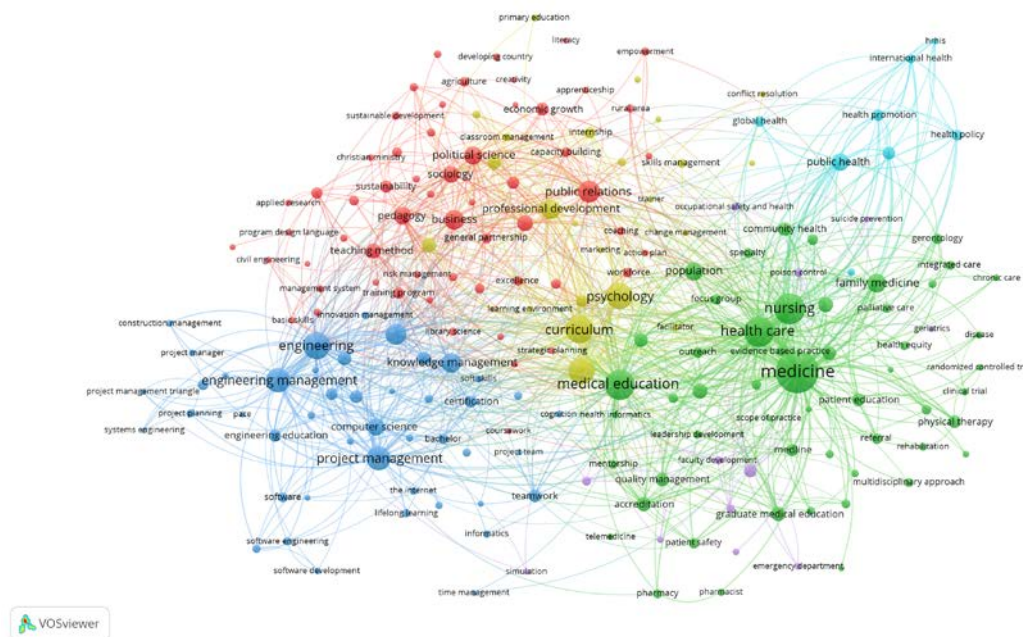


図 1 Microsoft Academic での検索結果を VOSViewer を掛けて可視化した図

これをみると、medicine, health care, nursing, medical education という医薬関係のドメインが 1 つの領域(緑色)になっていて、研究数も多いことを示している。もう 1 つが、engineering, project management, knowledge management, engineering management, higher education,

computer science という工学系ドメインになっている(青色)。また、第三領域として、public relations, business, political science, sociology, pedagogy などの社会科学的ドメイン(赤色)である。そして、psychology, curriculum, competence がコアとなって、社会科学との接

近を professional development, mathematics education で、医薬系—社会科学系との間に skill management、医薬系とは facilitator をおいている黄色の領域の 4 つになっている。

Microsoft Academic は Google Scholar と同様に広く収集しているデータベースなので、トップジャーナルを集めている Web of Science で黄色の領域のキーワードも入れて検索した結果、図 2 になった。赤色の領域は教育・訓練のシステム化であり、緑色は訓練等の時のケア概念を示したものであり、黄色がスキルやアセスメントなどの項目で、オレンジが仕組みに関するもの、水色が成果に関するもの、青色が図 1 の赤色の社会科学的な要素があるものである。

しかしながら、図 1 ならびに図 2 を見る限りにおいて、前項<sup>1)</sup>で指摘させていただいた先行概念があることを前提とした研究や、中高生に教える研究は両データベースから検出した約 700 件の文献の中には見当たらなかった。本特集において、これらのことに対する示唆を、各著者からいただき、少しでも現状からの発展がある施策へとつながるようになることを期待したい。

#### 参考文献

- 1) 吉川厚:教育として見た国際P2M学会に対する期待、P2M マガジン、Vol.10, pp.20-23 (2020)

(2021年3月12日 受理)

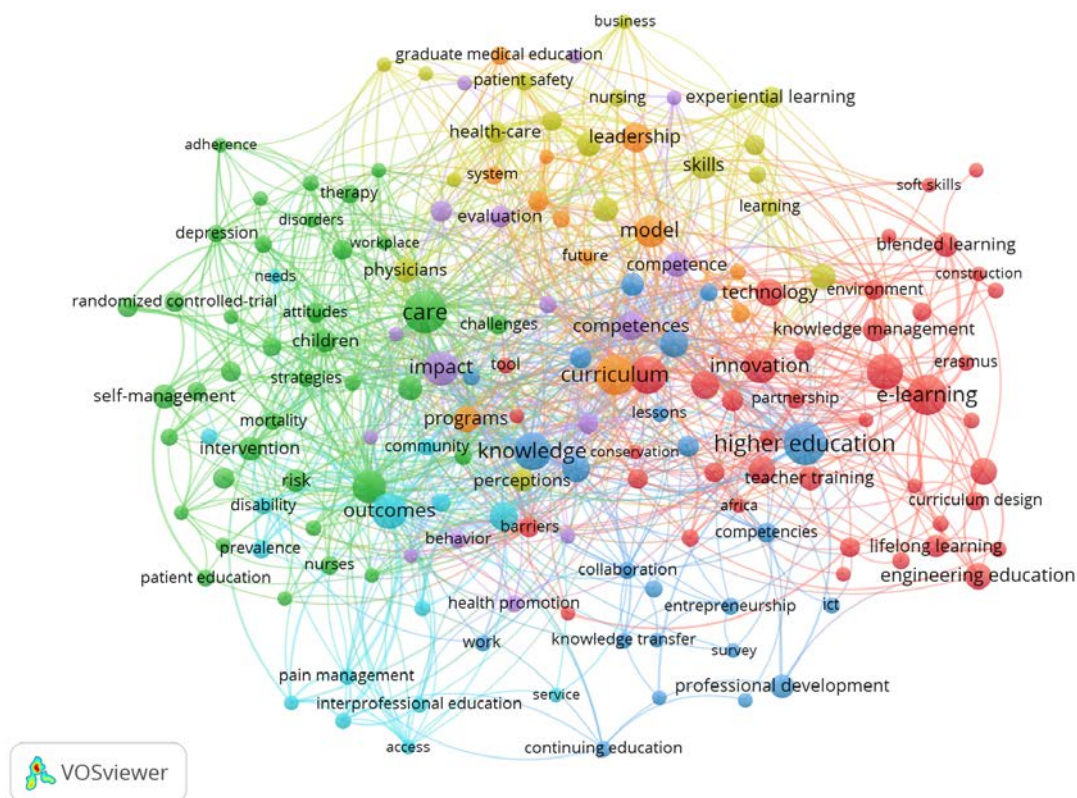


図 2 Web of Science での検索結果を VOSViewer を掛けて可視化した図